きらり通信 Vol.3

神奈川県立子ども自立生活支援センター
平塚市片岡991-1　0463-56-0303
http://www.pref.kanagawa.jp/div/1329/
編集　広報委員会　印刷　あしがら印刷

～「つながる」ということ～

子ども自立生活支援センター 支援部長
野坂正径

「きらり」に支援部長として赴任して早1年が過ぎようとしています。

「きらり」には、乳児院、福祉型障害児入所施設、児童心理治療施設と3つの施設が併設しており、日々人数の変動はありますが、現在は約70人名の子ども達が24時間この施設で生活をしています。普段現場に出ることのない私にとって、子ども達の名前を覚えることが赴任しての最初の試練でしたが、子ども達の通学への見送りの場面を活用したり、外で遊んでいたり、散歩している場面にできるだけ声を掛ける等して、約半年間掛かりましたが、子ども達の顔と名前が一致するようになりました。乳児院の子どもたちは、見慣れぬ大人に突然声を掛けられ、顔を引きつらせるようなことも多々ありましたが、引率していた職員さんの細やかなフォローのおかげで、大泣きするまでには至りませんでした。本当に感謝です。

さて、本題に入りますが、「きらり」には、大切にしている「基本理念」というものがあります。この基本理念は、昨年度から施設の基盤作りを行ってきた職員だけではなく、この施設の立ち上げに尽力してきたすべての職員のこの施設に対する思いが詰まっている言葉ということで引き継がれていますので、私なりにですが、その意味を噛みしめながら実践につなげていけるよう心掛けています。その中で、「つながる力を育みます」という言葉があります。今回は、この紙面を借りてこの言葉の意味について私なりの解釈を書いてみたいと思います。

まずは、子ども達自身です。子ども達は、この「きらり」という施設の毎日の生活で、大人から大切にされる体験を通して、自分の感じていることや考えている事を適切に伝えていくことを学んでいきます。そして、周りの人を信頼できることや大切にすること、さらに、周囲に認めてもらいたいという気持ちも出てくるようになります。それは、まさに「つながろうとする力」だと思います。

しかし、「きらり」で生活する子どもたちは、一定期間この施設で生活をするだけです。子ども達は、これまで生活していた場所から、課題があってこの「きらり」という場所につながってきましたが、次に「退所」や「地域移行」という形で次の場所に移っていきます。また、限られた「きらり」の生活の期間だけで子ども達の課題がすべて解決するわけではありませんので、残った課題も、その後の生活の場で新たなつながりを受けながら生活をすることにもなります。

したがって、私たちは、子ども達の毎日の生活だけでなく、退所した新たな「つながり」のために、入所当初から次につながる保護者や関係機関さらには地域と子ども達がつながっていけるよう支援することが大切になるということになります。「つながる力を育む」ということは、そういった意味も含まれているということだと理解しています。

私が、この新たな地で子ども達とつながるために、約半年かかったように、子ども達には、自ら身に付けた「つながる力」で、できるだけ早く、周りとスムーズにつながって成長して欲しいと思っています。

そのためには、皆さんとの日々の「つながり」がとても大切になります。私たち職員は常に皆様との関係を常に大切にしていきたいと思っていますので、今後ともどうぞよろしくお願いします。

みんなで歌おう「きらりの歌」

「きらり」が開設されて間もなく、五領ヶ台分校の先生方の間で「分校の校歌をつくりたい。」という話題が出ました。その後、実現に向けて動き出したのですが、その過程で「せっかく新しい歌をつくるのであれば、施設全体で歌える曲が良い。」ということになり、施設や分校の行事で歌う「施設歌」と、いつでもみんなで楽しく歌える「愛唱歌」をつくることになりました。

施設歌は、当初より名前が挙がっていた、地元神奈川県の音楽家で、合唱曲「コスモス」の作詞作曲で著名なミマス氏に依頼し、愛唱歌は、中里学園歌の編曲や録音をされた当施設自立支援課の金子譲課長補佐につくっていただくことになりました。（愛唱歌「きらきら きらり」作成への思いや経緯は、金子さんの「きらり リレートーク」に詳しく書かれています。）

ミマスさんには何度も「きらり」においでいただき、主に子ども第三課「ぎんが」の子ども達と交流していただきました。その中で、子どもたちの様子や発する言葉、思いを汲みながら、また、きらりの敷地や施設内を丁寧に歩いていただき、イメージを膨らませて曲づくりにつなげていただきました。その結果、きらりの皆さんの思いや願いが詰め込まれた曲「きらり空に咲く」ができあがりました。

この曲の２番にある「五領ヶ台」という古い地名（字名）は、いくつかの理由からミマスさんにお願いして入れていただきました。まず、現在の「きらり」がある場所は、県立五領ヶ台高校の敷地であったということ。残念ながら統廃合で高校自体は無くなってしまいましたが、在学された方々にとって、母校は大きな存在であり、決して消えることのない大切な思い出です。「きらり」の職員さんの中にもこの高校の卒業生がいらっしゃるということをお聞きし、ぜひ歌詞の中にだけでも校名を残せたら、と思いました。二つめに、今回CDに歌を録音していただいたボーカリストのSachikoさん（ミマスさんの奥様です。）が五領ヶ台高校の卒業生であるということ。高校の跡地に建てられた施設の歌をミマスさんがつくり、卒業生の奥様が歌うという素敵なご縁からこの曲はできあがりました。そして最後に、「ぎんが」の子ども達が通う五領ヶ台分校の学校名を入れていただいた、ということです。分校は小中学生全員で歌える校歌をつくりたいという希望があり、「きらり空に咲く」は施設歌であると同時に、分校の校歌としても大切に歌わせていただきたいと思います。

二つの曲は、施設や学校が続く限り、この先長く残っていくものです。歌う人や環境が変わっても、ずっと大切に歌い継がれていくことでしょう。

五領ヶ台分校　斉藤敦史

「きらり」のみなさんへ

～ミマスさんより、きらりの子ども達へメッセージをいただきました～

歌詞の最初にある『あたたかな風』とは、皆さん一人ひとりの生活と成長をいつも親身になってサポートしてくださる「きらり」の職員の方たち、分校の先生がた、そして共に学ぶ仲間たちのことを指しています。こうした素晴らしい環境のなかで、ぜひ楽しくのびのびと、いろいろなことに挑戦し、取り組んでいただきたいと思います。

歌詞の中にもあるように、憧れや夢は人生でもっとも大切なものです。

『あんなことを自分もやってみたい』『あんな場所へ行ってみたい』『あの人みたいになりたい』『ああいうことができるようになりたい』……。どんな小さなものでも、そうした憧れや夢を持ち、学び続けることによって、人は少しずつ成長し、いつか本当にそうした自分に近づいてゆきます。その過程のなかで素晴らしい出会いにも恵まれ、人生も大きく展開してゆきます。

このたび作らせていただいた『きらり空に咲く』は、「きらり」の皆さんの想いや言葉を紡ぐかたちで作詞作曲をしました。皆さんから出していただいたキーワードや文章すべてを何度も読み返し、歌やメロディに少しずつ反映させてゆきました。このような大切な歌作りを任せてくださり光栄に思います。僕も一生けんめい作りました。楽しく元気に歌っていただければ幸いです。

ぜひ、皆さんには、ここで過ごした日々が今後の素晴らしい人生の礎となるよう、多くの仲間たちとともにたくさんのことを学び、未来を描き、夢を育み、幸せの種を心に蒔いていただきたいです。ありがとうございました。

施設歌「きらり空に咲く」

作詞作曲：ミマス

1　あたたかな風に　つつまれて
未来を信じて　空を見上げよう
はてしない憧れ　ここに広げ
いつでも　ともに　あゆみつづけよう
心をむすびあって　歌声をかさねれば
しあわせの花がきらり　空に咲く

2　鳥たちがさえずる　五領ヶ台の
みどりのような　ゆたかな心
いつの日も胸に　学びの小道を
楽しく　ともに　すすんでゆこう
心をむすびあって　夢を奏であえば
いのちの星がきらり　空に咲く
みんなの星がきらり　空に咲く

「２番の歌詞『学びの小道』は、子どもたちの散策路や通学路となっている、きらり東西棟の周回路のイメージでしょうか？」という質問に対して、お答えいただきました。

『学びの小道』について

抽象的なイメージでとくにどこの道を表しているということはありませんが、どのように解釈されるかというのはそれぞれの自由ですので、通学路を思い浮かべながら歌ってくださるというのも『正解』だと思います。

2番のAメロの歌詞は主に、施設を案内していただいたときに、2階の窓から見た周囲の森林や丹沢の山々の風景を見て浮かんできたものです。

アクアマリン（※）の楽曲も全てそうなのですけれど、僕の基本的な想いとしましては、人間は自然との関わりのなかで本当に大切なことを学ぶのだと考えています。鳥や虫や花や木々や空や海や星という世界と意識的に関わってゆくということは豊かな人生を送れるかどうかを直接的に左右すると思うわけです。そうした想いから『鳥たち』『みどり』という言葉が出てきており、『学びの小道』にもそうした環境のなかでじっくり過ごし語らう時間を大切にしてほしいという願いを込めています。

愛唱歌「きらきらきらり」

作詞：きらりのみんな
作曲：金子　譲

1　ひばりのさえずる声に　青空見上げた
白い雲と緑の木々がまぶしい
川辺の街と山々を　遥かに望み
広場にみんな　集まってる
ここに　なりたい夢のたね蒔こう
楽しいことがあったら　思いきり笑ってみよう
一緒に笑えば　もっと楽しい
つまずいて転んだ時は　つかまっていいよ
立ちあがった君は　きらきら笑顔が　きらり

2　ぎんがの星の輝きが　皆違うように
君も僕も　みんな違っていいよ
困ったときに言ってみる「なんとかなるさ」
たぶん答えは　一つじゃない
夢は育って　いつか花咲く
悲しいことがあっても　一人で我慢しないで
誰かに話せば　心晴れるさ
みんなみんな　かけがえのない　大切な一人
いつも見守っている　空に太陽が　きらり

君がいるから　僕がいるから
みんないるから　うれしい
楽しいことがあったら　思いきり笑ってみよう
一緒に笑えば　もっと楽しい
心が元気無い時は　一休みしよう
歩き出した君は　なりたい自分　近づいているよ
みんなのみらいが　きらり

きらり　リレートーク（2）自立支援課　課長補佐　金子　譲

「タイムマシン」

サザンオールスターズの「勝手にシンドバッド」を聞くと、中学一年の時の体育祭を思い出します。放課後遅くまで教室に残ってクラスの看板を作り、応援合戦で声を張り上げてこの歌を歌い、小学校とは違った高揚感と緊張感、そんな当時の光景や空気が歌と共に蘇ってきます。

歌は、聞いていた頃に時間を巻き戻してくれるタイムマシンです。時に写真よりも日記よりも、その当時の気持ちに帰してくれます。

『「きらり」の歌がほしいね』という話題が上がった時、「きらり」立ち上げに関わった自分なりの想いもあって、誰に頼まれた訳でもなく勝手に「きらり」の曲を作ってみました。センターとして歌作りの企画が始まると、光栄にもその曲をそこに加えていただけることとなり、歌詞を作るにあたって子どもたちや職員へ歌詞に入れたい言葉を募集したところ、そこに集まったものは私の勝手な「きらり」へのイメージとぴったり重なっていました。そうしてみんなが出してくれた14の言葉と6つのイメージを混ぜ合わせて完成した「きらきら きらり」には、センターに関わる全ての人の「きらり」への想いが詰まっている、とこれまた勝手に私はそう思っています。

みんないつか、「きらり」を卒業する日がやって来る。大人になった将来、ふと「きらきら きらり」を口ずさんだ時、ここでの日々や想いが蘇り、なりたい自分をまた目指していこうと思える、そんなタイムマシンにこの歌がなってくれたなら、それほど嬉しいことはありません。

ダンス部紹介！！

きらりダンスクラブは、昨年の2月から子どもたちの余暇活動として始まりました。医務課のスタッフがきらりの三つの施設が一緒に活動できる時間をつくりたいと考え、ダンスが上手くなる事が目的ではなく、身体を使い、そこに集まるみんなが一緒に感じあえるそんな時間を共有することを大切にしています。職員も参加し、子どもたちと一緒に楽しんでいます。ダンスの指導はきらりの職員がしていますが、子どもが先生をすることもあり、また外部から指導者に来ていただくこともあります。

ダンスのジャンルは何でもありなので、ご指導いただける方はぜひきらりにご一報を！

自立支援課　千葉　朋子

楽しかったハロウィン

平成３０年１０月３１日（水）に子ども自立生活支援センター内でハロウィンを行いました。ハロウィンとは、もともと秋の収穫を祝い、仮装をして悪霊を追い出す宗教的な意味合いのある行事でしたが、現代では子どもたちが仮装して近所の家を訪問し、お菓子をいただくものに変わっていきました。

ハロウィン当日、仮装をしたのは子ども達だけでなく、お菓子を配る職員も仮装をしました。子どもたちと職員はハロウィンの最中は常に笑顔であり、両者共に全力でハロウィンを楽しんでいた様子が窺えました。来年度も子どもたちと職員の笑顔が見れるよう、ハロウィンを続けていこうと思います。

子ども第二課　高島　康

スポーツ大会を行いました。

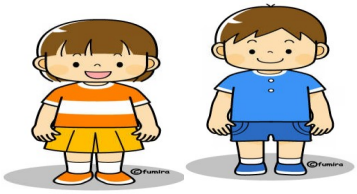
小学校1～4年による「玉入れ」では、練習の成果を発揮し、かごいっぱいに玉を入れることができました。玉を数える大きな声、勝った時は飛び跳ねて喜び、負けた時は大きな拍手、片付け競争も全力で、最後の最後まで元気いっぱいな姿を見せてくれました。小学校5・6年生と中学生の「棒引き」では、お互い一歩も退かずに同じ本数を集めていく展開となりました。最後に残った棒には小学生も中学生も次々に集まり、その一本が勝負の分かれ目となる大接戦となりました。分校生徒全員で参加した「借り物競争」、キャタピラに乗って取りに行った紙に書かれているのは全て「〇〇な人」、一体誰を選ぶのか…そして選んだ人との二人三脚は、この日一番の盛り上がりとなりました。最後は応援に来てくださった方々も参加しての全員で「綱引き」、小さな体を目一杯使って引っ張る小学生、顔を真っ赤にして力強く引く中学生、そして自然と湧き上がる「よいしょ！よいしょ！」の掛け声が体育館中に響き渡りました。

また、本番を迎えるまでには練習だけでなく、ポスター制作や道具作りなど各学年協力して準備をしてきました。当日もそれぞれが役割を果たし、全員でこのスポーツ大会を作っていくことができました。この日の最後には、勝っても負けても笑って楽しむことができた全員に金メダルが渡されました。

五領ヶ台分校　　佐藤　友貴

ご寄付やボランティアのご協力ありがとうございます。

子どもたちも、とっても喜んでいます。



問合せ先：0463-56-0314　当センター　自立支援課直通（8:30～17:15）